

次回企画展予告

第12回企画展

近代陶芸 浜田庄司展

会期：昭和61年7月1日(水)～8月31日(日)

会場：当館企画展示室

■「近代陶芸 浜田庄司展」

今回の企画展は、中国・朝鮮陶磁から離れて、初めて日本の近代陶芸作家・浜田庄司(1894-1978)の作品を取り上げ開催します。

同氏は、大正15年、柳宗悦の「日本民芸美術館設立趣意書」が発表され民芸運動が始まると、河井寛次郎、富本憲吉等と共に参加し、実践(実技)を通じて同運動を盛り上げ、今日の民芸ブームを作り上げた第一人者といえましょう。大正9年、在日中のバーナド・リーチと知り合い渡英、ロンドンから南西約400kmのコンウォールの小さな港町セント・アイヴスに登窯を築いて制作。同13年帰国、同地と同様に素朴かつ健康的で人情味のある益子の人々の暮らしに心を打たれ、ここに居を定め作陶に入りました。作風は、同地の土、釉薬を基本とし、朝鮮・沖縄を始め日本各地の民窯を訪ね様々なものを吸収し、民窯雑器のもつ健やかな暮らしのおいする浜田民芸を作り上げました。重厚で力強く、実用本位のやきものです。

同展では、約40点を一堂に展示し、同氏の作品を通じて、日用雑器(民芸)のもつ健康・素朴で活きた美しさを鑑賞して戴ければ幸いです。展示品は、同氏のよき理解者であった神戸在住のコレクターの御好意により一括拝借するものです。同時に同じコレクションから民芸の代表的染織家・芹澤鎌介(1895-1981)の作品も拝借しバックに添え併陳する予定です。(K)



船瀬蒔絵陶鉢

丹分指輪大鉢

顔絵茶碗

お知らせ

第4回講演会を下記の如く開催致します。

日時：昭和61年7月5日(土)
午後2時～午後4時
(受付は午後1時より開始します)

場所：中之島中央公会堂3階中集会室

講師：京都国立博物館学芸課工芸室長
河原 正彦氏

演題：「京焼の歴史」

*講演会の案内で会員登録を提示していただきますので、会員登録をお忘れなく御参下下さい。なお、講演会当日に継続の申込みをされる方は美術館受付でお申下下さい。

談話室

★当事務局員は館内で働く者の中では新参ですが、当初、職員の数意外に少ないこと、少ない職員の数も個性的な点には驚かされました。総務のT課長もそのユニークさに関しては学芸員にひけをとしません。その課長の最近のエピソード。美術館の所在地に関する問合せは結構ござりますが、課長がその種の電話を取るや否や、吉田の者は一斉に目をそばがてます。と言うのも、ある日、電話で道順を尋ねられたT課長、極めて真摯な態度で、あくまで懇切丁寧に、「地下鉄北浜の階段を登ると、4ひきのライオンがあります……」。4ひきのファイオンとは、御存知、受験生が夜な夜な跨ったとゆう二越のライオンのモデルにもなった、あの難波橋のライオンのこと。確かに、橋の4すみにはファイオンの石像がございます。しかし、お尋ねになった方は、中之島公園とゆうのはサファリ・パークだったのかと思われたのでは危惧しております。

★造幣局の通り抜けは終わりましたが、中之島公園のバラはこれから、いよいよさわやかな初夏が訪れます。美術館で静かな時を過ごされるのも一興かと存じます。会員の皆様の御来館をお待ちしております。(Y)

編集後記

友の会が発足して1年。最初に御入会下さった皆様にも、継続の手続きをしていただくことになりました。期限のせまった皆様には、事務局からお知らせをさしあげております。2年次の会員証は「飛青磁花生」です。会員証それ自体も楽しんでいただければと思っております。(Y)

1986年5月15日発行(年4回)/通巻4号

大阪市立東洋陶磁美術館



友の会通信

ASSOCIATES NEWS

No.4

編集 大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局

発行 大530 大阪市北区中之島1-1-26 TEL.06(223)0055

美術館の舞台裏(1)

美術館の活動は、大きく分けて、展示、収集、調査研究、普及の4つの部分から成り立っていることは、前にも申しあげた通りです。これらの活動を支えている舞台裏の装置や表情は、皆さんの目に触れていても気がつかれないことや、外部に現れていないことも多いと思います。美術館の仕事、とりわけ当館の活動方針や考え方を御理解頂くために、当分、展示活動を中心に、舞台裏の仕組みをいろいろ御紹介して行きたいと思っております。

展示活動には、ハードの部分とソフトの部分がありますが、ハードの部分、すなわち展示設備から始めましょう。当館の場合、幸いなことに建築設計の当初から特に細心の注意を払い、展示設備は、ほぼ理想的な状態が実現しています。展示設備は、見る側からすれば見易く、使用する側からすれば使い易いことが基本条件です。当館の場合、見易い、物がよく見えるとよく言われますが、その舞台裏はどうなっているのでしょうか。

まず第一に、展示品を置くケースの寸を、適当な高さで統一したことです。日本人の平均的な身長を勘案して経験的に割出したのが、1100ミリという高さでした。この台の上に置かれた展示品は、目の位置から見て、最も自然で無理のない姿勢での観賞を可能にします。また、ケースのガラスの高さも、1000ミリに統一しています。大きなガラスは、その中に置かれた陶磁器を、小さく見せようからです。

第二に、ケース内の照明方法に工夫をこらしたことです。人工光線(蛍光灯)と白熱灯の二系列を使っていますが、ケース内に調光が可能です。染付のケースでは蛍光灯を強く、赤絵や鉄砂のケースでは白熱灯の方を強くするなど、陶磁器の種類によって光の性質を変えられます。また、光源の一部を遠光器によって曇くことにより、展示品の背後の壁面を暗くしています。このため展示品は、自然な感じで、明るく強調されて見えます。

第三に、展示ケースの前に手摺を設けたことです。ケースのガラス越しに陶磁器を観賞する場合、できるだけ近づくと必要ありますが、幅のひろい平らな木製の手摺が大きな効果を挙げていることは、皆さんもお気づきのことでしょう。これらのことはすべて、陶磁器を如何にすれば最も美しく見せられるか、観賞本位に考えが木の工夫の一端で、当館が博物館ではなく、美術館を標榜している証の一つともなるものです。

大阪市立東洋陶磁美術館

館長 伊藤 郁太郎

◆第3回講演会要旨◆

「最近の中国古陶磁事情」

日時：昭和61年3月1日(土)午後2時～4時

会場：中之島中央公会堂

講師：京都国立博物館調査員 藤岡 了一氏

ご承知のように新中国になりましてからもう40数年、考古学ブームは日本よりもずっと先に始まっています。新しい中国の出発と同様に大きな考古学の開発事業・調査研究が全国的に始まりました。もう従来の常識は通じなくなってしまった。どんどん資料が集まる一方で、その処置に困る種々の問題が出てきた。じゃあこの際大学でやきもの歴史の講座をつくろうと言うことで、そのためにはテキストがいるわけなんです。『中国陶磁史』と言う分厚い、紐がい活字でいっぱい詰った本が2、3年前に新しくできあがった。できあがった途端にこれではいけない。新しいもっと重要な資料がどんどん出てくる。今まで依った常識的なものは、理解を深めるためにはこれを書き直さなくてはならない。そう言うような調子なんです。

例えば、ごく最近のある情報紙によりますと、磁青磁を焼いた華泉窯の窯、これは浙江省のずっと山の奥にありまして中国の人たちといえどもなかなか容易には調査発掘ができない。しかし、最近道だけは通ずるようになったらしいのです。それから、有名な南宋官窯。そのうち郊外窯の窯跡はなかなかちゃんとしてあったのですが、文化大革命で工場を作るために窯跡が半分以上削られてしまった。最近では修内司官窯の調査がもう終わっているんですね。我々知らない間に現地の学者の人たちが発掘調査致しまして、現地のふたつの官窯の窯跡をそのまま覆ってしまって博物館にしようと言うことになりつつあるんです。

またごく最近の情報になりますと、西安の北、約100km程にある陝西省銅川市黄堡鎮と言う町。ここに大きな青磁の窯跡がだいぶ前に発掘されている。これが、いわゆる耀州窯です。ところが驚いたことには、耀州窯は唐代には白磁を焼いておった。白地に黒の文様がある磁州窯系ですね。更に、『官』と言う文字の刻まれた青磁片が残っております。つまり北宋の時代には耀州窯の中に官窯が設けられておった。それから更に色々なことがわかりました。唐時代に唐三彩を焼いた大きな窯跡もみつかりました。従来、唐三彩を焼いた窯は、洛陽の南の方にある鞏県で発掘されておりました。しかしこれは非常に規模が小さく、窯も小さい。唐三彩の小品ばかりを焼いておった。ところが長安の都からは唐三彩の明器、副葬品が沢山出てま

いりますが、どうも洛陽のものど違う。作行きが違うんですね。非常に鋭い、鮮やかな彫刻をもつ。どうもおかしいと思っていたんですが、長安の近くで出ます唐三彩、それが耀州窯で青磁を焼くまで焼いておった。こうして、唐、五代、北宋、南宋、金、元までの耀州窯の縦の歴史がわかった。これはちょうど中国の陶磁史の重要な一端を示してある。それが耀州窯の新発見によってわかったわけです。

私、去年、広東省から福建省へ旅行しました時に、非常に珍しいものを見て参りました。それは福建省の省都・福州に博物館がございまして、そこで色々のものを見てきたんですが、越州窯系の窯跡が福州の近辺にある。そこからの出土品は一見して古い越州窯の形式を持ってあるんですね。時代がどうしても上る。六朝時代の形式を持ってある。それが唐代の墓、或は窯跡から沢山出てまいりました。そうしますと重要な問題、日本にある越州窯と呼ばれておるものとの関連の問題が出てまいりました。東京国立博物館に法隆寺の国宝ばかりを集めた所がありますがその中にこれがある。その壺には「子」が納められておる。これは確か明治に法隆寺から帝室へ献納されました四十八体仏、其の他色々の布どとか金工類などに混っておりまして、たっぴひとつ、この中国の陶磁器が菓の入れ物として残っておったわけです。その壺と福州の壺が似ている。最近越州窯の研究が進みまして、どうもこの形は唐じゃない、もっと古いものだと。私は現在は東博の壺は六朝、或は隋、隋よりももっと古いかも知れないと思うんです。そう言う古い形式を持った青磁の窯が実は唐の時代にまでずっと息長く続いていると言う非常に異様な、常識の常識では考えられないようなことが福建省で起こっている。

それから、福建省には其の色々な窯があります。有名な天目茶碗の建窯も新しい問題が出つつある。これは生地が黒くて口にもちよつと黒いものが残っている。少し補修をした跡があるんですが、黒い天目茶碗の窯跡から出てきた白い天目の茶碗なんです。白天目と言うのは日本で茶人の方ではやがましいものになっておりますが、そう言うものがもう宋の時代に福建省の建窯で作られておったと言うことが考えられる資料なんです。よく見ますとこれは窯変のものではなくて、明らかに白い釉をかけている。そう言うものが出てきたと言うことはちょっと我々の常識を破るものなんです。これを掘った学者自身も何と解釈して良いかわからない、実に不思議だと言っておりました。

それからここに何方饅頭のようなものが出てまいりました。ここに「供御」と言う文字がある。これは大子にお供えすると言う証拠になるものなんです。トチンという黒道具です。ある時には茶碗の高台裏に供御と言う文字を彫りつけたものもある。つまりこの建窯でも天子の御用に供するお茶碗を焼いておったと言うことなんです。建窯の位置と言うものがまたひとつ高まったわけなんです。

それから問題は変わりますが、私も平生非常に親しくしておる呉須赤絵と称するものがある。インドネシア、フィリピンあたりからも沢山日本に来ておる。この呉須赤絵は今までは福建省の今の廈門の

近く、広東省との省境に近い所に石碼と言う所がございまして、そこで焼かれたものであると言うのが常識になっておったんでございます。私も最近福州からずっと南へ車で下りまして泉州から廈門へ行く途中、例の珠光青磁の窯のある同安の町、そこを素通りして廈門大学へ参りました。廈門大学にはそう言う輸出陶磁器の歴史を丹念に調べておる専門学者がいる。日本で発行されている呉須赤絵の本がございまして、これを持って行って、こう言うもの焼けたところがわかっておるはずだと言うことを申し上げたんですが、全然知らないと言うんです。ヨーロッパの学者だとか現地のインドネシアあたりの人たちは、殆んど間違いなく、この種の呉須手と言うものは汕頭と言うところの近辺で焼いたものである。スフトウ・ウエア、スフトウ焼きと云んでおるんです。しかしどうもそれが怪しいものだから福建省の最高権威の人にそれを聞いたところが、そう言うものが出たあとは全然認められない。広東の方面でもこれはできていないという。困ってしましましてね。呉須赤絵の戸籍がわからなくなってしまったが、どう言うところで焼かれたものかと思ひますがと言う質問に対して、わからないけれども、写真だけの判断だけでも景德鎮じゃないかと言うんです。これには私も驚いてしまつて、それはちょっと無理だろうというようなことを言つたんです。この汕頭の奥地に潮州と言うところがありまして、ここで焼いた公算も考えなくちゃいけない。潮州を調べた人によりますと、窯跡の上に大きな町ができて窯跡を発掘することができない。そういう窯が何十とある。ある人は99あるというようなことを言う。そういう膨大な窯跡の上に町ができてしまつておるんですから、問題をこれからの将来に任せしかたないというような結論になってしまいました。このように未だ判らないことが沢山ある。しかし少しづつ判つて来たこともある。それが中国の現状です。(このあと、中国各地の博物館にある珍しい資料をスライドで紹介頂きました)

(文責：友の会事務局)

プロフィール

藤岡 了一氏

1909年、大阪生れ。大谷大学卒。京都国立博物館工芸室長、大阪芸術大学教授を経て、現在、京都国立博物館調査員。著書は、「所収の染付」平凡社、「茶碗」平凡社など多数。

